

インターフェイス

稲宮 健一

五木寛之の「大河の一滴」にインターフェイスが流行り言葉として使われていた。この古い表現は面授だと云う。面授とは人と人との間の密接な意志の伝達のやりかたと説明されている。普段、深い思想や、それを含んだ言葉は文字を通じて伝わると言われているが、五木はそれだけでなく、肉声から伝わってくる人の言葉の感覚が命であると書いている。

彼の心に残っている逸話として、親鸞と弟子の唯円が心を通わす対話を挙げている。唯円は自分の心の中に何となくさびしい気持ちがしてならない、涙がこぼれることもあると親鸞に吐露した。それに応えて親鸞はそれでいいのだ。唯円のさびしさは浮上しては消えるものかもしれないが、親鸞が持つさびしさは自分の一生を通じて背負う骨身に滲み入るさびしさだと説いた。この意志の通じ合いは師匠と弟子の間の密接な生活を通じた面授があつて初めて実現できると、五木は倉田百三の名著から引用している。

インターフェイスという用語を見て、おやと思った。この用語は電気工学、特に通信分野の技術用語である。身近な例として、コンセントに接続するソケットがある。電気を使う側と、送る側で取り決められた形状が合つて接続ができる。海外に行くと、現地に合った形状と、電圧のソケットと器具が必要で、異なつたインターフェイスの例を実感する。通信ではもっと複雑なインターフェイスを備えないと信号の送受ができない。

現在はコロナ禍で多人数による共同作業の場合、お互いが離れた場所でも、リモートで分担することがしばしばだ。この新しい環境を、都心の喧騒を離れた自然環境に恵まれた新鮮な形態の仕事場と歓迎されている。しかし、大学ではリモート授業だけでは面授が抜けてしまふ。授業では教科の教育だけでなく、かつて先生の雑談を通じた人生経験談などが今でも頭に残っている。企業でも新規な発想の原点は三人寄れば文殊の知恵が必須だ。早くコロナ禍の束縛から解き放されたい。